

女の靈相あるいは *As you like it.*

高知尾 仁

ウォーター・ローリーの文章世界についての注釈に、グリーンブラットが、しるしている言葉の束は、この一文を書きはじめるにふさわしい。mind という語は、fancy, thoughts, conceit, affections, memory, heart, spirit, soul, fantasy, invention, dreams, imagination といった語とともに使われる、というのだ。“こころ”とは、こうした言葉の、多様な戯れの中に書きしるされるもの、というところだろうか。それとも、この中の一語にひかれて、あとは互いに共鳴する幻の世界を、一日、手なぐさみに書きしるすこと、なのだろうか。更に、こうした表象行為ではなくて、表象作用の相対化の文章をひねり出すことなのだろうか。他者の“こころ”に出会えるとは、どんなディスクールなのか。

一日の、まよい込んだアフリカの世界で、他者の“こころ”に出会えた、などという、作文が可能ほどの文章家でない自分が、単に、“言い及ばぬ”などというトポスを使用してみせるわけにもゆかない。文化人類学にとって、文章可能となる世界は、民族誌的に云って、“こころ”の表象、ということになるのだが、なにが民族誌という文章行為を可能にしたのか、という問を持つ者にとっては、このことは、この他やっかいなものである。“こころ”の現象学を、一時たなにあげておけば、“こころ”の表象は、多種多様な、対象社会の言葉の中から、“こころ”をひきはなす行為であることが多い。だから、文学と民族誌の文章とは異なるものだという議論にもなるのだが、そうしたロマンティズムも、ここでは、たなに上げておこう。“我が心”が、二つ相対しておかれた鏡に、無限に模像をくりひろげる、としても、そこが、アルカディアでなくて、アーデンの森だとしたら、人類学のはじまりの世界であるローリーやシェイクスピアから、ロマンティズムを排除してみせることに、実はなるとしたら、“こころ”の間は、人類学の核心に我々をつれて行くことになろう、と思われる。この核とは、まずは対象である世界にはないもの、と考えていただく。

キクユ語に、*ng'oma* という語がある。辞書でも民族誌でも、うまく訳すのがむづかしいものとしてあらわれる。ここでは、“靈相”と訳しておいた。“相”をもつ、という意味だが、heart や mind ではない。普通 spirit とか shade と訳される(といって、*ng'oma*=shade という辞書は見たことがないが)。*ng'oma* は、多くのバントゥ語で“太鼓”を表わすが、キクユは別、ということでもある。死して人は *ng'oma* になる、のではなく、死は *ng'oma* の生成(人体から、又は、体内から、但し出現ではなく)ということ、しかも、ハイエナや火山において *ng'oma* は相を持ち、気のふれた者(*ng'oma* の憑依と訳されようが)においても *ng'oma* は相をもつ、ということになる。しかも *ng'oma* は見る事が出来ない。不可視の可視か、可視の不可視か、といえ、死の関連で、当然、フーコーが医学文章でみた如く、前者ということになるのだが、もう一つのやっかいは、この語につく、“女”というしるしである。

“女の靈相”即ち、*ng'oma cia aka* とは、なんでもない、日々目にする“つむじ風”のことだ。聞きもらしたが、程度は不明。彼らキクユ人に、何故か、と問うと、“女はそうしたものさ”と答えてくれた。*ng'oma* に性別があるわけではないから、この“女”というしるしは、別に意味づけを示す、ということなのだろう。これでは、アーデンの森のロザリンドではないか。しかも、目にするのは“風”というわけだ。目に見えるものを *ng'oma* といい、可視と不可視の戯れも *ng'oma* という。その戯れをしるして“女”という。ここでしるされるのが“女”ではない。しるしが“女”ということだ。女が男に化けるのではなくて、女形が“女”をしるし、として使うのだ、という言葉はひきよせる。“こころ”も“女”も、使われる言語の、ここでは、ロマンティズムの後の文章世界でのコンテクストではなくて、その文章行為の対象世界でのコンテクストを前提するとしても、その前提がアプリオリであることは、否定されない。後に残るのは、だから、書かれたもので見つめることになろう。*ng'oma* はまだよく分らぬ。口上をきりあげ、ひとまず、*ng'oma cia aka* そのものは、*as you like it* と述べておこう。